

其の後約二百二十五年を経た西曆紀元前三世紀の中葉、阿育王は止み難い渴仰の情から、これ等八箇所(或は少くとも七箇所)の塔を掘り出して、其の遺骨を同種の聖堂に頌つたので、爾來、印度に此の種のを多く見るに至つたのである。かくて、印度で窣覩婆(塔)と稱する此の種の墓塚が、佛教建築中に著しい役目をなした所以も已に解せられる。而して、始めから之が殊に佛教の遺物となり、其後彫刻を施すに至つても、長い間、之を其玉垣や高い門の裝飾とするに過ぎなかつたので、この玉垣や門は、古來印度の風習で、煉瓦や石の墓塚を取圍んだものである。今度は、此の裝飾が忽ち、殆んど純然たる叙事的傳記的性質を取つて終始したので、其の根本の目的が、世尊在世中の主な挿話を、歸依者の眼前に記念するにあるとすれば、之程自然な事は他にないのである。然し、佛陀の遺骸と密接に結んでゐる敬虔といふ事で、佛教の浮彫は、一般に何の爲に、どういふ意味であるかゞ知れるとしても、この浮彫を構成してゐる特性を知る上に何等助けとならず、寧ろ、此の裝飾は殆んど全く、説話を象つてゐるが、而も何處までも、世尊の尊容を現はす